エドアルド・ペルシコの建築批評にみるイタリア合理主義建築の評価について

イタリア合理主義建築に関する研究 その2

A STUDY ON EDOARDO PERSICO'S CRITICISM
ON THE ITALIAN RATIONAL ARCHITECTURE

A study on the Italian rational architecture Part 2

北川佳子*, 入江正之**

Keiko KITAGAWA and Masayuki IRIE

The purpose of this study is to consider Italian Rationalism, which is one of the modern architectural movements in Italy. This paper deals with Edoardo Persico's criticism on modern architecture, especially on Italian Rationalism. To comprehend his thoughts on architecture, this paper also follows his history. As the result, he considered Italian Rationalism didn't have any strict principles and <style>. He also accused Rationalists of using slogans such as <mediterraneità> ambiguously because they denied the original meaning of <razionalismo> for such irrational using. Persico's criticism is based on Catholicism, Europeanism and some ideas reflected in his various activities. He regarded Italian Rationalism as one of the European modern architectural movements and sought the solutions of their problems comparing architecture with art.

Keywords: Italian rational architecture, Architectural criticism, Edoardo Persico, Mediterraneità, <Casabella>

イタリア合理主義建築、建築批評、エドアルド・ペルシコ、地中海性、<カーザベッラ>

1. 序

1.1. 研究の目的

エドアルド・ペルシコ (Edoardo Persico, 1900-36) は、1920年代末より30年代前半のイタリアで、建築及び芸術批評を主な活動とした著述家である。彼はその建築思想を体系的に本にまとめることはなかった。しかし、B. ゼーヴィ (Bruno Zevi) は『近代建築史』の中で、イタリア合理主義建築運動で活躍した G. テッラーニ (Giuseppe Terragni, 1904-43) 及び G. パガーノ (Giuseppe Pogatschnig Pagano, 1896-1945) と同等に彼を取り上げ、その批評活動の意義で評価しており、また、この時代のイタリア建築を対象とした研究においても、合理主義建築に対するペルシコの発言の引用が多く見られる¹⁾。

本稿は、イタリア合理主義建築に関する一考察として、ペルシコが携わった様々な活動を辿ることから彼の思想の推移を捉え、更に、彼の建築批評に示された、同時代のイタリアの建築運動、特にイタリア合理主義建築に対する評価を検討することで、イタリア近代におけるこの運動の建築思潮の位置付けを試みる²⁾。

1.2. 既往研究

現在まで、イタリア近代建築通史或いはイタリア合理主義建築研究の中でペルシコを取り上げた論文は、イタリア国内外共に数多く見られる³⁾。一方、ペルシコを研究対象とする論文の殆どが、イタリア

の研究者によるものである。後者の代表的なものとして、G. ヴェロネージ (Giulia Velonesi) や R. マリアーニ (Riccardo Mariani) による、一次史料の編纂⁴⁾ やそれに基づく論文⁵⁾、ペルシコの回顧展カタログ⁶⁾ 等が挙げられる。しかし、これらのどの研究においても、ペルシコの建築批評をもとに、イタリア合理主義建築を捉えなおす試みは未だなされていない。また近年では、文学、思想分野でペルシコを取り上げた研究⁸⁾ もみられており、建築分野に専念するまでの彼の活動を本研究で検討することも、建築思想の背景を理解する上で重要と考えられる。

1.3. 研究方法

本稿では、まず、ペルシコの建築批評の基盤となる思想を理解するため、彼の様々な活動経緯を辿り、次に、建築・芸術に関する活動について、既往研究及び私信等の一次史料から検討する。続いて、これらの結果を参考に、建築批評を読解し、それを通して、彼のイタリア合理主義建築に対する評価を考察したい。

以上の論文構成で、活動経緯に関しては、建築批評活動を開始する以前に彼の思想に影響を与えた事柄について、建築活動に関しては、画商で芸術評論家の P.M. バルディ (Pier Maria Bardi, 1900-2000)、建築批評誌<カーザベッラ> (Casabella) の共同監修者 G. パガーノとの関係及び彼等との活動と、ペルシコの建築批評に関係すると考えられる設計作品を検討項目とする。また建築批評では、近代建築に関する代表

* 早稲田大学理工学部建築学科 助手・工修

** 早稲田大学理工学部建築学科 教授・工博

Research Assoc., Dept. of Architecture, Faculty of Science and Engineering, Waseda Univ., M. Eng.
Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Science and Engineering, Waseda Univ., Dr. Eng.

的な三論文を取り上げ、ペルシコがイタリア合理主義を批評する際に引合いにする「地中海性」という言語、芸術と建築の関係に対する解釈を検討項目とする。

2. ペルシコの活動の経緯

2.1. ナポリ(1900-27)

ペルシコは1900年にナポリに生まれる。21年、ナポリ大学法学部を中退するが⁹、その年以降の彼の活動、及び主な発表論文等は〈表1〉に表される。彼は、大学時代から文学・思想活動を行い、外国にも関心を持つようになる¹⁰。また、熱心なキリスト教信者で、カトリック系雑誌の刊行も試みた(図1)¹¹。そして、トリノで活発な出版活動を行う社会思想家P.ゴベッティ(Piero Gobetti, 1901-26)に関心を持ち、思想誌「ラ・リヴォルツィオーネ・リベラレ」(La Rivoluzione Liberale, 以降<LRL>)及び「イル・バレッティ」(Il Baretti, 以降)の編集活動に加わる¹²。ゴベッティは、当時勢力を拡大するファシズムに対し、国民的知徳的変革と政治指導層の新形成の必要性を唱え、知識人運動と労働者運動の協同でその課題を達成させるという、自由革命主義運動と呼ばれる反ファシズム運動を進めていた¹³。しかし、当初ペルシコがゴベッティに近づいたのは、文化活動における彼の主導力や組織力のためであり、彼に宛てられた初期の手紙に、政治に関する内容は見られない¹⁴。後にペルシコは、政治的にもゴベッティの側に加担するが、出版活動では、政治的な内容の<LRL>ではなく、その別冊の、欧州主義を主題とする文芸誌の論文で、彼の思想への歩み寄りが指摘される¹⁵。従って、ペルシコは、ゴベッティの反ファシズム以上に、欧州主義に共鳴したと考えられる。彼は、実際の出版活動ではよい境遇ではなく、また、小説もゴベッティから厳しく批判されたが¹⁶、彼に対して最期まで忠実だった¹⁷。

2.2. トリノ(1927-29)

ゴベッティの死後、ペルシコはトリノに移るが、友人に「厳しい

冬」(doloroso inverno)と伝えるように¹⁸、生活は楽ではなかった。そのような経済的苦境の中、フィアット(FIAT)の工場労働に関する小論「フィアット:労働者達」(La Fiat:Operai)を発表する¹⁹。当時のトリノは工業都市として栄え、新しい産業社会から労働者という階層が生じていた。この論文で、彼はまず、フィアット工場(1926-36,Matté Trucco)、次に、この工場での労働者達の日を文学的に描写し、また、全体を通して「秩序」(ordine)という言葉の繰り返す。既往研究では、彼の労働者階級に対する認識に関して、ゴベッティ、グラムシ(Antonio Gramsci, 1891-1937)の思想との関連が指摘される²⁰。ゴベッティは、生前、労働者の共産主義化の過程とともに、フィアットを国の産業化の過程の象徴とみなす論文を発表した。グラムシは、ゴベッティ同様、トリノで反ファシズム運動を進めた人物で、共産党の指導者だった。彼は論文「未来都市」(La città futura)を思想誌「新秩序」(L'ordine nuovo)から発表するが、論文表題の「未来都市」のイメージと思想誌のタイトルにある「秩序」との関係は、ペルシコがみる、工場労働とその「秩序」との関係であると指摘される²¹。労働者達は、人間の意志による秩序に従うのではなく、規律が第一であるこの工場で、秩序に統轄されるとペルシコは述べていた。しかし、彼はさらに、労働者達を「古典劇場の群集」、彼等を囲む高い壁を「コロッセオ」(Colosseo)と形容し、労働者達の様子に「秩序:従うべき古典的秩序(ordine antico)にまさに従順な群衆である、労働者の意識の奥に、神の意志が告げる・・・(略)」と表現する。従って、彼は、工場労働に古典性、宗教的な意味も読んでいたであろう²²。また、彼は、フィアット工場に関しても、その外観の簡潔性に「秩序の原理」を読み、さらに「秩序」<神><法><服従>という言葉を用いて建築を描写する²³。ナポリ時代の活動、或いは「秩序」という言葉の多用から、ペルシコがこの論文で、ゴベッティとグラムシを意識したことは推測される。しかし上に述べた理由で、この論文における彼の主題は、労働者という新しい階層の認識から共産主義を発展させた二人の思想とは異なると考えられる²⁴。

＜表1＞ペルシコの活動履歴

	ペルシコの活動、建築作品	ペルシコの主な発表論文	関連事項
1900	2月8日ナポリに生まれる		(1901)ゴベッティ、(1917)<Ordine Nuovo>発刊(グラムシ)
1921	大学法学部で科目履修後、卒業論文提出せずに退学		2月ゴベッティ、<ラ・リヴォルツィオーネ・リベラレ>(La Rivoluzione Liberale, 以降<LRL>)創刊
1923	12月、ピエロ・ゴベッティへ手紙	「La città degli uomini d'oggi」(A.Quattrini,Firenze)	ゴベッティ、2月と3月に刊行される
1924	小説の草稿を持参してトリノ、ゴベッティを訪問 ゴベッティのグループに加わり、<LRL>等の編集活動開始	「Lettera dalla Spagna」<LRL>(12.16)	ゴベッティ、2月と3月に刊行される
1925	1月から2月中旬までナポリにて拘留される	「I partiti catalani」<LRL>(1.11) 「Ritratto di Valle-Inclán」(7.7) 「Studio su Caillaux」<LRL>(10.18)	ゴベッティ、2月と3月に刊行される
1926	この頃<カッターリチ>(Cattolici)創刊に失敗	「Ritratti contemporanei: Joseph Caillaux」<Critica Fascista>(9.1)	2月バリエにてゴベッティ死に 第1回ノヴェチェント・イタリアーノ展(2.14)
1927	トリノに移る Motor Italia社で編集に携わった後、Fratelli Riba社に転職	6月「Lettera a Sir Bickerton」n.6 「L'idea spagnola」<Popolo di Roma>(11.3), 「L'anima della Spagna」<Popolo di Roma>(11.25) 12月「La Fiat operaia」<Motor Italia>(Torino)	モンツァ・ビエンナーレ 12月ゴベッティ、バリエに渡る <LRL>休刊
1928	編集所「Biblioteca italiana di Edoardo Persico」設立		第1回イタリア合理主義建築展
1929	バルディから画廊運営及び<ベルベデーレ>(Belvedere, 以降<Bv>)編集を依頼され、ミラノに移る	「I sei pittori di Torino」<Le Arti Plastiche>n.13(7.16)	1月トリノにてガルッポ・ディ・セイ(以降<G>)展 第2回<G>展(ミラノ)開催(11.16)
1930	(〜32)雑誌<ラ・カーザ>(La Casa Bella, 以降<C>)及び<ミリオネ>のカタログ編集に携わる ガッローネ、ロザイとリッチ等フィレンツェグループと交流	2月「Apparizione di Apollinare」<Bv>n.2 <C>、<Bv>にモンツァ・ビエンナーレに関する一連の記事 5月「Stile」<C>n.29 6月〜31年1月<C>にA.サンテリアに関する一連の記事	モンツァ・ビエンナーレ 12月ゴベッティ、バリエに渡る <LRL>休刊
1931	講演「Invenzione cristiana di Enea」(I.29) 画廊運営を辞す 第二回合理主義建築展ミラノ巡回展で講演「Ceci tua casa」(6.19)	「La biennale di Venezia」<ランプロジアーノ>(L'Ambrosiano, 以降<A>8.5), 「I sei pittori di Torino, II」<A>(8.12)	第2回イタリア合理主義建築展、バルディ <ムッソリーニのための建築に関する報告書> (Rapporto sull'architettura per Mussolini)発表
1932	ペルシコとバルディの関係悪化	8月「La Vittoria」di Fontana」<C> 3月「Lucio Fontana II」<C>	ファシスト革命記念展
1933	バガノと雑誌<C>共同監修 (〜35)<C>、<ドムス>(Domus, 以降<D>)の編集デザイン 講演「Il capolavoro sconosciuto」(5.10) 講演「Ottone Rosai」(12.18)	リッター・ラ・レテラリア」<L'Idia Letteraria, 以降<L>)にトリエンナーレに関する一連の記事「Intervista」(6.2), 「TV alla Triennale di Milano」<Gli architetti italiani>(8.6) 「Una lezione di stile」<C>8.9	<C>、<La Casa Bella>から「Casabella」に名称変更 ミラノ・トリエンナーレ 雑誌<クアドランテ>(Quadrante)創刊(〜36)
1934	講演「L'Ottocento nella pittura europea」(2.17) 選挙宣伝広告とイタリア航空博覧会<金草の園>、ニッソーリと協同 講演「Pittori siciliani」(6.5), 「Mistica dell'Europa」 店員<バカー>、ニッソーリと協同(Largo Santa Margherita)	4月「L'Architetto Gio Ponti」<LL>(4.29) オイエッティに関する記事「Ci siamo scolti」<C>n.77, 4月号発表差し止め 6月〜35年1月、リットリオ宮設計競技に関する一連の批評記事 8月「Lucio Fontana」<LL>(8.4) 11月「Punto ed a capo per l'architettura」<D>	<ノヴェチェント>宣言 フィレンツェ鉄道駅 サウディヤ新都市 リットリオ宮設計競技 ミラノにてイタリア航空博覧会
1935	トリノにて講演「Profezia dell'architettura」(1.21) 店員<バカー>、ニッソーリと協同(Corso Vittorio Emanuele) パリの見本市の事務店<ドムス>、知人及び弟レナートの住宅内装設計 夏、ミラノ、サン・ヴァットレにて拘留 第6回ミラノ・トリエンナーレ<替りの間>(設計競技にて一等、 パランティ、ニッソーリと協同、彫刻:フォンタナ、翌年発表)	4月「Un progetto di Ponti」<LL> 12月<D>n.96別冊「Arte Romana」(Editoriale Domus,Milano) 「Dopo Sant'Elia」(監修のみ)(Editoriale Domus,Milano)	ミラノ・トリエンナーレ
1936	1月11日、ミラノにて死亡 ミラノ・トリエンナーレ<替りの間>	「Lucio Fontana」(Edizioni di Campografico,Milano)	ミラノ・トリエンナーレ

この表は、参考文献1)-5),7),8),10), 註2の文献をもとに筆者が作成

＜図1＞雑誌「カッターリチ」創刊の予告(発表年月不明)

＜図2＞<G>展(ミラノ)のカタログ、1929年末

この時期、6人の画家で結成された<グループ・デイ・セイ>(Gruppo dei 'Sei', 以降<6>)が展覧会を開催し²⁵、論議を呼んでいた。ミラノで画廊を経営するバルディは、この展覧会の評判を知り、彼の画廊<バルディ>(Bardi)での<6>展の開催、美術誌<ベルヴェデーレ>(Belvedere, 以降<Bv>)の編集の協力をベルシコに依頼する²⁶。そしてこのことが、ベルシコがミラノで活動する契機となる。

2.3. ミラノ(1929-36)

29年にミラノに移ったベルシコは、31年に画廊運営(3.1.)を辞して、建築批評誌<ラ・カーザ・ベッラ>(La Casa Bella, 以降<C>)等の編集活動(3.2.)を行う。またこの建築誌で共同したパガーノを通じて、<ドムス>(Domus, 以降<D>)、(リターリア・レッテラリア>(L'Italia Letteraria, 以降<LL>)等)に様々な小論を発表、建築論争にも参加、33年以降は、当時の国内外の建築に関する重要な論文発表、講演も行う。このように、ミラノにおける彼の主な活動は、建築批評、編集・出版活動だが、一方で、小規模の設計活動も行った。34年のミラノ・ガレリアでの選挙広告塔と航空博覧会の<金章の間>、彼の死後に発表された、36年のトリエンナーレの<栄光の間>(3.3.)は、その代表的なものである²⁷。様々な活動を進められる中、彼は35年夏に一時拘留され、36年1月11日に急死する²⁸。

3. 建築と芸術に関する活動について

3.1. 画廊活動とP.M.バルディとの関係

ミラノにおける、ベルシコの最初の画廊活動である<6>展(図2)は騒動を引き起こし、論議を呼んだが²⁹、彼は、その後も様々な展覧会を開催する³⁰。一方、画廊活動と並行したバルディとの編集活動に関して、<Bv>でのベルシコの署名の記事は30年以降に確認されるが、実際は、バルディの署名、或いは匿名の記事の数点をベルシコが書いたと指摘される³¹。さらに、画廊の展覧会カタログでは、ベルシコが草稿を書き、バルディが校正するバルトリニ(Luigi Bartolini)署名の原稿が確認されており(図3)、この時期は、まだ彼の名が十分に知られていないと推測される³²。30年にバルディがローマに移ると、彼の画廊<バルディ>は<ミリオーネ>(Milione)と改名³³され、ベルシコはその運営を任される。しかし、その後の画廊運営で二人の関係は悪化し、ベルシコはバルディを「耐えられない、不安の種」「教養のない人」と友人に記し、彼に対する反感を表すようになる³⁴。31年3月、MIAR総書記長A.リベラ(Adalberto Libera, 1903-63)とバルディの主催で第二回イタリア合理主義建築展(以降、第二回展)がローマで開催されるが、その7ヶ月前、MIARトリノ支部長のパガーノは、ミラノ巡回展での講演をベルシコに依頼していた³⁵。そして、31年6月、ベルシコは講演を行い、その成功がMIARミラノ支部からバルディ

に報告される(図4)³⁶。しかし、ベルシコは後に、イタリア合理主義建築に関する論文(4.1., 4.2.)で、この展覧会とバルディを非難することになる。33年、二人は、この時期の代表的な建築批評誌<C>と<クアドランテ>(Quadrante, 以降<Q>)の監修にそれぞれ携わる³⁷。

3.2.<カーザベッラ>の活動とG.パガーノとの関係

ベルシコは、30年より携わる<C>で、建築批評、装丁デザイン等、総合的な編集活動を行う³⁸。33年にはパガーノと<C>の共同監修を開始して、名称も<Casabella>と変更する³⁹。当初の活動では、ファシズム寄りのパガーノとの政治的立場の相違にも関わらず、建築に対する考えにおいては対立はなく、また、彼を通じて、ベルシコは他の雑誌・新聞で発言する機会を得たとされる⁴⁰。しかし、<C>誌上の、実際のベルシコの発言の範囲は限られており、論文にも抑えられた表現が指摘される⁴¹。後に、合理主義建築と体制の関係が論争のテーマになると、彼は<C>以外で建築批評活動を展開する⁴²。

<C>は<Q>と並ぶ、この時代の代表的な建築批評誌となるが⁴³、その理由の一つに、建築家以外の人物も作品紹介、批評に携わったことが挙げられる。つまり、それらが技術的なレベルに留まらない内容となり、<C>が文化的な意義を有することができたと考えられる⁴⁴。

3.3. 建築設計活動 トリエンナーレ<栄光の間>1936年

ここでは、ベルシコの建築批評と関係があると考えられる、36年のミラノ・トリエンナーレの<栄光の間>(図5)について検討する。

この作品は、35年に行われた設計競技⁴⁵の当選案で、彼の死後に実現された。彼は、この作品をニッツォーリ(Marcello Nizzoli, 1887-1969)、バランティ(Giancarlo Palanti, 生没年不詳)と協同し、彫刻をフォンタナ(Lucio Fontana, 1899-1968)が担当するが、最初のイメージの発案、報告書とその図版はベルシコによるものだった⁴⁶。

彼は、報告書⁴⁷の中で「作品のスタイルは、新しい建築の崇高な概念に従い、また、古典的な構成は、ヨーロッパの新しい<ルネサンス>を常に熱望する、多くの<合理主義者>の傾向にはもっともなもの」と述べる。さらに、作品を「新しい観点で、列柱という古典的原理を高めた、モニュメンタルな特徴」、「内部構成に即した実際の工夫」、「概念の一致、様式的な関係、主題の適切さにおいて、建築と具象芸術の完全なる調和の実現への追求」と説明し、「近代的な手法」と「ヨーロッパの平和」を主張した。後者の主張は、彼が、35年の講演(4.3.)で、当時のヨーロッパの社会と建築の状況を危ぶんだことと関係すると考えられる。この作品は、彼が古典主義へ回帰する変化の表れとみなされている⁴⁸。しかし、この作品における古典性は、平和、そして芸術と建築が均衡に達する文化の象徴であり、例えばファシズムといった、ある特有な政治・社会構造の特性ではない⁴⁹。彼は、ファシストと反対の立場にありながら、結果的に、ファシズムを古典主義等

<図3>ベルシコのタイプによる、バルトリニ署名の論文の草稿

<図4>第2回合理主義展(ミラノ巡回展)のベルシコに関するバルディへの電報、1931年6月20日

<図4>(左)の電報は以下のように書かれる

「TENUTA PERMANENTE GRANDE
SUCCESSO CONFERENZA PERSICO
AUGIRIA VITTORIA INIZIATIVA AMICI
TORINESI
-MIAR MILANESE-
(8)
-ベルマネンテで行われた講演で、ベル
シコは成功をおさめた。
(次のトリノ巡回展においてトリノの友人
達の、イニシアチブの勝利を祈る
-MIAR ミラノ支部-

<図5>ミラノ・トリエンナーレ<栄光の間>、36年

の言葉に置き換える彼等と同じ主義を唱えることになる⁵⁰。

4. 建築批評について

4.0. ペルシコの建築批評活動の経緯とその評価

ペルシコは、建築批評活動を30年より開始する⁵¹が、その時期、彼は未だ建築の専門知識がなく、画廊運営にも携わっていたため、活動内容は限られていた。特に、<C>の論文の多くは、展覧会や内装、或いは芸術・文化的な内容である。しかし、この年から連載される<スティーレ>(Stile, スタイル)⁵²と<再生する都市>(La città che si rinnova)⁵³の中には、後に展開される、文化或いは芸術と建築の関係に対するペルシコの見解が暗示される。前者で彼は、ヨーロッパの好尚の創造をテーマとして、都市生活の描写、時代の様相からスタイル、様式を見い出すが、それに共通する視点が、その後の<様式>に関する彼の論文に見られる⁵⁴。そして、彼がみる<様式>とは、この時期のイタリアの建築論争のテーマの一つである様式の問題に、文化的な問題を挿入すると解釈されている⁵⁵。後者では、都市の近代化に対する人々の認識を高めるために様々な建築の再生例を示した。そして、国全体の美観の再生には都市問題の改善が欠かせないと考え、さらに、イタリア再生建築が、外観の美しさだけでなく都市の集合体としての魅力に反映されることを望んだ。

31年、彼は第二回展のミラノ巡回展に際して講演を行い、この時期のイタリアの建築論争の論点を明確にするために、ヨーロッパ建築の文脈から近代運動を論じた。彼は、この頃から建築論争に介入、一方で、<C>では国外の建築を紹介する。33年、バガーノと<C>の共同監修を開始すると、ペルシコのイタリア合理主義に対する認識も深まる。しかし、二人のイデオロギーの相違から、ペルシコは<C>ではなく、<LL>を論争の場に選ぶ。そして、<イタリア建築家>(Gli architetti italiani)と題する、イタリア合理主義建築に対する重要な見解を示す。34年、<D>の監修者で建築家のG. ポンティ(Gio Ponti, 1897-1979)を賞賛する論文⁵⁶を発表する。この論文で、彼は、ポンティの作品に古典建築のモチーフの模倣を超えた<様式>を見い出す。そして、この論文と、先述の論文<スティーレ>から、二人の<様式>に関する類似性が指摘される⁵⁷。11月、ペルシコは代表作となる<建築の原点>(Punto e da capo per l'architettura)を<D>で発表する。35年、近代建築に対する独自の見解を示した講演<建築の預言>(Profezia dell'architettura)をトリノで行う。その後、一時拘留されたため、批評活動は制限されたが、『サンテリア以後』(Dopo Sant'Elia)⁵⁸の監修、<C>の監修は続けられる。最後の論文は、ローマ彫刻をテーマとした<ローマ芸術>(Arte Romana)⁵⁹と伝えられる。

以上、ペルシコの活動の経緯を辿ったが、ここで、彼の論文の特徴について、そして、彼の建築批評がイタリア近代建築史において適切かどうか検討する。彼の論は、簡潔で暗示的である一方、偶発的で筋の一貫性がないために、全体の把握が困難であり、さらに、建築に対する技術的な検討が少ない⁶⁰。またC. デ・セータ(Cesare De Seta)は、近代運動における建築史学に言及し、N. ペヴスナー(Nikolaus Pevsner)との論文と比較して、ペルシコの論の歴史的観点が不明瞭であると指摘する⁶¹。従って、彼の建築批評の全てが、近代建築史において適切であるとは言えない。しかし、彼は、建築を歴史的に体系化するためではなく、イタリア合理主義者との関係の中で、切迫した必要性から論文を発表したことを考慮すれば、彼の

論文は、当時のイタリア建築運動を把握するためには重要な史料と考えられる。また、ペルシコの論には矛盾がみられるが、彼は一つの近代の歴史解釈の、つまり建築批評の重要な点にふれ、活発に問題を提起し、厳格な歴史的枠組に固定されない視点で近代建築を捉えたことをゼーヴィは評価する⁶²。従って、ペルシコの論の問題点を留意すれば、彼のイタリア合理主義に対する評価をイタリア近代建築史における一解釈としてみるができるだろう。

これらの検討をふまえ、近代建築に言及した彼の建築批評の中で、代表的な三論文の読解を試みる。

4.1. <イタリア建築家>(Gli architetti italiani)1933.8.6

ペルシコは<LL>の第5回ミラノ・トリエンナーレに関する一連の評論の中で、この論文を発表した⁶³。<LL>上のこれらの論文は、同時期の<C>での展示作品紹介⁶⁴よりも全体的に厳しい論調である⁶⁵。

彼はこの論文で、合理主義建築家、特にグループ7と<Q>の創刊に関わったミラノ、コモの建築家に厳しい姿勢で対する。また、第二回展のバルディの発言、<Q>創刊号の<建築のプログラム>(以降、<プログラム>)に関しては、34年の論文(4.2.)で更に展開がみられる⁶⁶。

ペルシコはまず、「長い<合理主義>論争を明確にさせるために、トリエンナーレのイタリア建築家の作品を語るのではない」と断った上で論を開始する。次に、「イタリア合理主義は死んだ」と述べ、「観念と経験の裏ある運動で、ヨーロッパの好尚の基盤を革新した」外国の合理主義に対して、イタリアのそれは、本質的な必要性から生じたのではないこと、そして、そのために彼等の運動の「<様式>の欠如」を指摘する。さらに、<合理主義者>と<伝統主義者>の論争を、意味のない論争で、一貫性のないものと批判し、そして前者の主張に対しては、「国の好尚とヨーロッパの好尚との対照」という問題を厳格に理論化できないために、一つの近代様式を確立するという、彼等の渴望が妥協に陥ることを指摘する。ここで、チュッチの指摘から、ペルシコは、イタリアという一つの国家(stato)は国民(nazione)の現実に基づいており、さらに、ヨーロッパの一構成要素であるという意識をもっていたとみると、先述の様式をテーマとした論文がヨーロッパの好尚、普遍的な好尚の創造を目的としたことと同様、彼は、合理主義建築に対しても、「ヨーロッパの好尚」(gusto europeo)という普遍性を追求した上で、<様式>の確立をもとめていたと考えられる⁶⁷。

ペルシコは、次に、トリエンナーレでのミラノ、コモの建築家グループに対して、厳しい批評を行う。彼は、ある作品には「イタリア<合理主義>建築家の様式主義的退廃」と述べ⁶⁸、またある作品には、<プログラム>に示された<地中海性>という言葉を用いて、インスピレーションの一貫性がなく形成された<ヴィッラ・ストゥーディオ>スタイルと<プログラム>との矛盾を批判する⁶⁹。

ここで、合理主義者の<地中海性>という言葉の使用と、コルビュジェ(Le Corbusier, 1887-1965)との関係をみると、まずグループ7は、26年から27年にイタリア合理主義を宣言する際に、コルビュジェの論文を参考にする⁷⁰。その後、33年から34年にかけて、彼等とバルディは、コルビュジェを<イタリア>的、<ファシスト>的概念の<地中海性>を支持する一人として、ムッソリーニと面会させ、彼等の主張をファシズムに有利にさせることを試みる⁷¹。しかし、ペルシコは、既にこの論文において、<プログラム>及びトリエンナーレの作品から彼等の<地中海性>という言葉の多義的な使用を指摘していた。

彼は、テッラーニに対しては、計画中のコモのカサ・デル・ファツ

シヨ (Casa del Fascio di Como, 1928, 32-26、以下<CdF>)まで言及、「『大西洋横断船』のヨーロッパの傾向を明らかに否定し、<地中海性>という固定観念に陥り、何人かのローマ建築家を取り上げ、今度はロース (Adolf Loos, 1870-1933) が取り上げた形態を模倣する」と述べる⁷²。ところで、この発言から、彼は<CdF>を否定する一方、比較の例に挙げたノヴォコムン (Novocomum, 1927-29) を肯定したと読み取ることとできるだろう。実際、コモ市委員会に宛てられたペルシコの書簡の草稿では、彼はノヴォコムンを擁護し、「イタリアで建設された最初の近代的集合住宅であった」と評価したことが確認された⁷³。

ペルシコは、以上のように作品を批評し、「<合理主義>建築のなすべきことは、その概念の争いを究めること」と述べる。さらに、若手建築家の作品に対する評価の後、「イタリアにおいて、ヨーロッパ的な建築が可能か」と疑問を投げる。そして、先述の初期のイタリア合理主義に対する指摘、つまり、本質的な必要性を意識せずに誕生したために<様式>が欠如した、その運動の問題点から、上の問題の解決には、「一つの近代様式」の確立に「不可欠な前提条件を定める意識が必要である」ことを考慮しなければならないと述べる。

4.2.<建築の原点>

(Punto e da capo per l' architettura) 1934.11

34年に<D>に掲載されたこの論文⁷⁴は、31年の第二回展開催時に、バルディからムッソリーニに手渡された<(ムッソリーニへの)建築に関する報告書>(以降、報告書)によって、建築と国家の関係が意識された後の、イタリア合理主義建築運動に関するものである⁷⁵。ペルシコはこの論文で、第二回展とその事実上の主催者であるバルディの<報告書>の発言、この時期にミラノ、コモの合理主義者が多く用いる<地中海性>という言葉、都市計画設計競技にみる、退廃する建築運動の状況に言及する。

彼はまず、同時代のイタリアの建築論争において有益となる論文を紹介する一方で⁷⁶、例えばかつて友人だったサルトリス (Alberto Sartoris, 1901-99) の建築書⁷⁷を「好尚 (gusto) と芸術 (arte) を絶えず混同させるように、ヨーロッパの傾向を複雑に解説する」と批判する。

次に、建築と芸術の類似点を述べ、批評論文が同時代の芸術家の危険な道具となる例を挙げ⁷⁸、そして建築に関して、イタリア合理主義者の論について検討を進める。特に、彼等の論における<地中海性>という言葉の使用に関しては、ラーヴァ (Carlo Enrico Rava, 1903-85)、<プログラム>、さらに<Q>創刊以前に開催された第二回展の作品に言及する。まず、イタリア合理主義建築を宣言したグルッポ7のラーヴァの主張⁷⁹が、欧州主義から<地中海性>という言葉の浸透へと政治性を帯びることを批判する。それは、ヨーロッパへ向けられた視点が、<地中海性>という言葉によってイタリア国内に向けられ、彼の論が国家、政治を意識する内容に変化することに対する批判である。また、<プログラム>においては、その宣言には理論的展開がなく、<地中海性>を主張した次の項で、合理的傾向を支持して、<国際建築>を唱えるグロピウス等を取り上げる、彼等の矛盾を指摘する⁸⁰。彼はさらに、<地中海性>という言葉の曖昧性がイタリア合理主義に常に伴うと述べ、イタリア合理主義建築展⁸¹を取り上げる。そして、第一回合理主義建築展(以降、第一回展)で強調された<ローマ性>と同様、第二回展の作品に見られる<地中海性>も、合理主義論争での主張と一貫させるため、運動の正当化のために用いられ、それは「コルビュジェが関心のある<地中海性>ではない」⁸²こ

とを明確にした。また第二回展は、<ローマの遺産>である第一回展と同様の立場ながら、作品は凡庸な外国建築家の<地中海>的な手法を求めた、活気のないものと述べる⁸³。そして、<報告書>の、建築への国家の介入という要請とともに⁸⁴、イタリア建築家は、合理的、理性に従うという<合理主義>の根本的な主題を否定し、政治的闘争という方法にイタリア合理主義の運命を委ねたことを批判する。

一方で、彼は、ミラノとトリノの合理主義建築家が、近代建築運動という<ヨーロッパ>の一つの出来事に加わる力が必要であると直観した、その先見性について、彼等を初期合理主義の誇りと評価するが⁸⁵、また、欧州運動にその運命を結び付ける彼等の感傷的な熱望を、意識の表現、つまり<様式>において解決できないことが問題であると述べる⁸⁶。彼はさらに、イタリア合理主義者は、国家との関係に取組む点で、建築経済の技術的解決を主題とするドイツの運動とは異なり、また、コルビュジェ等<合理主義者>からはその論争方法を運動に採り入れるのみで、ヨーロッパの動向に無関心であると指摘する。そして彼等のスローガンが、欧州主義から<ローマ性>、<地中海性>、更に協調体の建築 (architettura corporativa) へ変化することを指摘する。

彼は、協調体の建築の例として、33年のバヴィア都市調整計画設計競技を取り上げ、その参加者に<協調体都市>の具体的な提案を求めた⁸⁷。そして、競技案に示された「退廃するロシア建築」の状況から、ヨーロッパ建築の状況に論を移す。彼はまず、19世紀末から20世紀初頭に確立したヨーロッパ建築の概念の基礎が変質する状況⁸⁸を危ぶみ、特にイタリアの現状を問題視する。次に、<近代性>を前提とするはずの「イタリア合理主義建築史」は、文化の潮流をファシズムという政治体制に保証し、協調することに案じるという「感傷的な追求に消耗される」ため、<近代性>を否定することになり、従って「イタリア合理主義者は反歴史主義者である」⁸⁹と述べる。さらに彼は、ヴェントゥーリの引用⁹⁰から、建築の問題を芸術一般の問題とみて、芸術家、ここではイタリア合理主義者が「征服するために必要な唯一の現実」、つまり<厳格な主義を信じる能力>、多くの<反近代派>と争うまでの意志という、最も困難な問題に取組み、さらに、様式の問題で生命が枯渇するのを感じた後、その能力と意志は、彼等が次世代に残す財産を形成すると述べ、彼等の問題の、解決の糸口を示した。

4.3.<建築の預言>(Profezia dell' architettura) 1935.1.21

この講演は、ミラノに移る前のペルシコの活動の場であり、ゴベッティ、ヴェントゥーリの街であったトリノで行われたが⁹¹、講演内容も、近代建築の流れを芸術のそれと関連づけ、さらに社会的状況も含めた広い視点から捉えたものである。そして彼は、近代建築について語る中に、テーマである「建築を超える」ことについて示唆した。

この講演の採録論文によれば⁹²、彼は近代建築に関して、建築の技術面を重んじた、技術的な近代建築史を批判する立場であった。そして、彼の友人が、造形価値の鏡に人類を映して概説する絵画史を考えたように⁹³、ペルシコは近代人類史と一体化する建築史を考え、さらに、近代建築史家が、鉄筋コンクリートや図面、有用性だけでなく、好尚の問題、「控え目であることを誇る」というヴェントゥーリの発言⁹⁴も考慮することを、彼は望んだ。そして、その例として挙げたドイツ建築とは対照的に、オイエッティ (Ugo Ojetti, 1871-1946) の「必要な贅沢」⁹⁵という発言には彼は理解を示さなかった。

彼はこの講演で、建築と芸術の関係に関して独自の見解を示した。まず、近代建築は近代絵画や彫刻とは異なる次元であるという建築史

家の見解に対し、印象主義は「絵画技術の革命で、近代性の表現の試みと平行するものである」という文を引用して⁹⁶ 反論を示す。そして「新しい建築は、キュビズムと呼ばれる、絵画と彫刻のある特有の好尚と同種のものである」⁹⁷というヴェントゥーリの発言に対して、「新しい建築は、キュビズムと同種のものではない」と述べる。彼は、この講演まで、建築と芸術の関係を言及する際にベントゥーリを論拠としていたが、この講演では、明らかに彼と異なる見解を示した⁹⁸。ペルシコは、先の発言をもとに、新しい建築は印象主義の軌跡から誕生すると主張し、建築の具象的要素を明確するために、印象主義派的な視点から見直す必要があると述べる。そしてその一例として、ライト(Frank Lloyd Wright, 1867-1959)を新しい建築におけるセザンヌ(Paul Cézanne, 1839-1906)と見なした⁹⁹。さらにライトの作品にある「人間の精神の自由に訴える」ことが、ラスキン(John Ruskin, 1819-1900)、モリス(William Morris, 1834-1896)の作品に見られること、その観念の展開が、「建築を超えること」になると述べた。

また、社会と建築の関係では、社会情勢に伴って建築が変容する例として、ヒトラーの方針による「ドイツ建築の退廃」¹⁰⁰、ウィーンの人民の家における社会共産主義者の蜂起を挙げ、このことから、近代建築は、ヨーロッパの近代制度の現在の試みではなく、かつての試みであったらうと述べる。そしてこのように社会状況から建築の状況を見ることができ、それが「建築を超えること」であると、テーマに再び戻る。また一方で、人は、時代や社会を表すヨーロッパ芸術を議論し続ける時、自立と精神の自由という芸術の深い意義を見逃すことになるとペルシコは考えた¹⁰¹。そして、近代建築の運命、預言は「精神の本質的な自由」を取り戻すことと述べ、彼がライトの作品にみるものを繰返す。この講演では、イタリア国内の社会状況は直接触れられなかったが、リットリオ宮設計競技¹⁰²の例に、社会を反映した、退廃するイタリア建築の状況が示唆された。

4.4. 考察

以上、ペルシコの近代建築に関する建築批評の中の、代表的な三論文を取り上げたが、彼のイタリア合理主義に関する評価は次のようにまとめられる。イタリア合理主義運動は、本質的な必要性から生じたのではないため、その概念について厳格な理論の検討がなされず、従ってその運動には<様式>が欠如する。しかし、イタリア建築を欧州の近代運動に結び付けることを試みた、その先見性に関しては、トリノ、ミラノの初期<合理主義>は評価される。初期<合理主義>の主張した欧州主義は、建築論争が展開するに従い、国家を意識したスローガンに移り変わるが、特に<地中海性>という言葉は、この運動を正当化させるために多義的に用いられる。そしてバルディは、第二回展の<報告書>において建築への国家の介入を要請したが、そのことで、合理主義者の運動は、理性に基づくという<合理主義>の本来の意味を否定することになる。

これらの論文の、イタリア合理主義建築に関する批評の対象は、バルディ、第二回展及びトリエンナーレの参加者、グループ7、そして<Q>に関わったコモ、ミラノの建築家であり、また彼の批評は、建築空間の具体的な分析、技術的解釈よりも運動の建築概念、社会や芸術との関係に関心が向けられる。従って、ここでは、イタリア合理主義の一部の建築概念、思潮に対する評価を検討することになる。

ペルシコの建築批評は、彼のそれまでの様々な活動による思想、例えばナポリ時代から信仰するキリスト教思想、文学活動やゴベッ

ティとの活動による政治思想及び欧州思想、画廊活動による芸術への関心が反映される¹⁰³。彼は欧州思想と宗教的価値観に基づいて、イタリア合理主義をヨーロッパの建築運動の中で捉え¹⁰⁴、また、批評において、ゴベッティと同様、ファシズムを反対する立場だった¹⁰⁵。また、ミラノでの画廊活動の頃から、彼の芸術分野の見識が深まり、建築と芸術の問題に対する視点が建築批評に示されたと考えられる。

ペルシコがイタリア合理主義について批評する時、その運動に影響を与えたバルディもまた、批判の対象となることがある。それは、例えば、ペルシコも関係した第二回展の<報告書>について、或いは合理主義者の作品及び主張に見られる<地中海性>という言葉について批評する時に示される。また、後者に関して、バルディと合理主義者は、ムッソリーニとコルビュジェの面会を実現させることで、ファシズムに対してこの言語と運動を正当化させることを試みたが、それとほぼ同時期に、ペルシコが彼等のこの言語の多義的な使用を<プログラム>等から読取り、批判したことは意義のあることと考える¹⁰⁶。

ペルシコは、建築批評において、社会との関係によって退廃する同時代のイタリア建築の問題を、ヨーロッパの建築の状況の中で捉えることを試みた。そして、建築の問題を芸術一般の問題とみてその解決を示唆し、さらに、近代の建築と芸術の流れを捉え直し、近代建築の誕生に関する独自の解釈を示した。

彼の基本概念は、各々の運動の中心的由来としての<秩序>を探究する、キリスト教思想であるとマリアーニはみる¹⁰⁷。その解釈に従えば、ペルシコが27年にトリノの工場労働でみた<秩序>は、その後の彼の建築批評において、彼が、建築に対して求めた<様式>とみなせるであろう。また、イタリアは国民の現実に基づき、またヨーロッパの一構成要素であるという宗教的価値観から、彼はイタリア合理主義に対し、ヨーロッパの好尚、普遍的な好尚の確立を追求した上で、その意識の表現、<様式>を求めた。このことから、<様式>の探究は、彼が建築をみる時の一つの視点であり、また、<様式>は、彼の建築批評における一つの基準とみることができる。

最後に、彼の建築思想の理解の一つとして、36年の<栄光の間>(以降<作品>)と27年の<フィアット：労働者達>(以降<論文>)にみられる古典性、宗教思想について検討する。彼は<作品>について、ヨーロッパの新しい<ルネサンス>としての古典的構成を主張する。そして、女神の彫刻¹⁰⁸を配置することから(図5)、彼の主張する古典性は、<論文>に示された古典性と同様に宗教的な意味を含むと考えられる。しかし、彼は<論文>において、工場労働の「働く」、或いは「秩序に従う」という人の行為に古典性を読み取り、また<論文>における<神>は<秩序>を支配する抽象的な存在であるのに対し、<作品>において、<神>は、フォンタナの彫刻によって具現化されている。このように、<神>の表現に関して、<論文>と<作品>に示される古典性の違いが示される。また<作品>は、<神>を表す彫刻の存在によって、一権力による支配を象徴する古典的伝統の復興という、ファシズムの主張に近い古典性を表現することになったのであろう。

5. 結

本稿では、ペルシコの活動を辿ることで建築批評の背景となる思想を捉え、そして彼のイタリア合理主義に関する評価の検討を試みた。イタリア合理主義運動をヨーロッパの建築運動、或いは建築と芸術との関係の中で捉えようとする彼の建築批評は、ナポリ、トリノでの文

学、思想活動による欧州思想及びキリスト教思想、ミラノでの画廊運営による芸術への関心が反映される。また、建築に<様式>という「意識の表現」を追求する姿勢は、彼のキリスト教思想に基づいた建築に対する一つの視点であり、彼の批評における一つの基準である。

イタリア合理主義者達は、その運動の発端とされるグルッポ7の宣言以降、第二回展及びその後の建築論争等において国家を意識し、また芸術等の分野と関わりながら運動を進めた。従って、この運動の建築思潮を理解するには、建築作品や建築家の活動だけでなく、当時の社会、芸術等と運動との関係も考慮する必要があるだろう。

ベルシコは、イタリア合理主義者に影響を及ぼしたバルディ、バガーノ等との関係の中で¹⁰⁹、建築批評活動に携わった。そして、彼は、批評において、国内の社会状況だけでなく、ヨーロッパの社会及びその建築運動の中でイタリア合理主義運動の問題点を捉え、さらに、芸術と建築の関係からその問題の解決を示唆する。イタリア合理主義建築に近い立場において、ヨーロッパの建築、社会状況、他分野への視野を持ち、またそのことで運動と距離を保ち続けた彼の建築批評は、この運動の思潮を理解する上で重要なものと考えられる。

[附辞]この論文を作成するにあたり、ジュネーブ大学リカルド・マリアーニ教授に、当時の一次史料を閲覧・提供させていただき、更に当時の背景等の御教示をいただきました。記して深く感謝申し上げます。

また本研究は、平成14年度文部省科学研究費補助金(若手研究(B) 課題番号14750534)により行われました。

[参考文献]

- Veronesi, Giulia (a cura di): Edoardo Persico. Tutte le opere (1923-1935), Edizioni di Comunità, Vol. I, II, 1964
- Mariani, Riccardo (a cura di): Edoardo Persico. Oltre l'architettura, Feltrinelli Editore, 1977
- Gatto, Alfonso (a cura di): Edoardo Persico. Critici e polemici, Rosa e Ballo Editori, 1947
- Di Paolo, Maurizio (a cura di): Edoardo Persico 1900-1936, AMM, 1978
- De Sera, Cesare (a cura di): Edoardo Persico, Electa, 1987
- De Seta, Cesare: Il destino dell'architettura-Persico Giolli Pagano, Laterza, 1985
- D'Orsi Angelo: Intellettuali nel Novecento italiano, Einaudi, 2001
- Veronesi, Giulia (a cura di): Edoardo Persico. Scritti d'architettura (1927-35), Vallecchi editore, 1968
- Veronesi, Giulia: Difficoltà polemiche dell'architettura in Italia, Libreria Editoriale Politecnica Tamburini, 1953
- Mariani, Riccardo: Razionalismo e Architettura Moderna, Edizioni Comunità, 1989
- Zevi, Bevi: Storia dell'Architettura Moderna, Einaudi, 1950
- Ciucci, G. and Dal Co, F.: Architettura italiana del '900, Electa, 1990
- Ciucci, Giorgio: Gli architetti e il fascismo, Einaudi, 1989
- De Seta, Cesare: La cultura architettonica in Italia tra le due guerre, Electa napoli, 1972

註

- 参考文献1) pp.191-203. 建築批評史の中でベルシコを扱う研究もみられる。De Fusco, Renato: L'idea di architettura. Storia della critica da Viollet le Duc a Persico, Edizioni di Comunità, 1964, De Seta, Cesare: Edoardo Persico storiografo in luce del movimento moderno, 参考文献6) pp.3-16, 参考文献5) pp.87-99(再録)
- 例えば和文版では、Gregotti, Vittorio: 松井宏方訳: イタリアの現代建築, SD 選書 p.42, 1979, Gregotti, Vittorio: 現代建築におけるラショナルリズムの模範, SD7903, 鹿島出版会, p.51, 1979.3. イタリア合理主義建築, SD8306, 鹿島出版会, p.42, 1983.6, Zevi, Bruno: イタリアの合理主義者たち, Sharp, Dennis: 合理主義の建築家たち, 彰国社, pp.219-220, 1985, SD7903, 鹿島出版会, p.52, 1979.3, Frampton, K.: modern architecture, a+u 8611, p.12, 1986.11, 鶴沢隆: 建築文化, 彰国社, p.95, 1995.9, G. Ciucci: テラーニと建築 Giuseppe Terragni, INAX 出版, p.21, 42, 1998等が挙げられる。またベヴスナーのベルシコに関する評も見られる。Pevsner, Nikolaus: Edoardo Persico, The Architectural Review, pp.97-98, 1966.2
- 本稿は、拙稿: エドアルド・ベルシコを通して建築に関する活動について、日本建築学会大会学術講演梗概集、建築歴史・意匠, PP.71-72, 2002.8の考察内容をもとに作成した。
- 註1, 参考文献6), 9), 10), 12), 13), 14)等。
- 参考文献1), 2), 3), Gatto, A. and Veronesi, G.: Edoardo Persico. Profezia dell'architettura, Muggiani Editore, 1945
- 参考文献6), 9), 10)
- 参考文献4), 5), Edoardo Persico 1900-1936 antografi, scritti e disegni dal 1926 al 1936, 12-25 maggio 1978. またベルシコの死後、知人等の悼辞も編集される。Veronesi Giulia (a cura del Comitato per le onoranze a Persico): Edoardo Persico Edizione, Achilli Lucini, 1936
- 参考文献7), D'Orsi, Angelo: <Il doloroso inverno>: l'esperienza torinese, 参考文献5) p.21-51, 7月2日に最終試験を済ませたが、卒業論文を書けなかったとされる。参考文献5) p.7.
- 哲学者クローチェ(Benedetto Croce, 1866-1952)の影響とされる。また、幾度かヨーロッパ諸都市を訪問したと記録されるが、20年のパリ訪問以外の事実は明らかではない。参考文献7) p.165.
- 経済的或いは政治的理由で実現しなかった。その推移について参考文献7) p.162-163. 最初の文学作品とされるのは『今日の人々の都市』(La città degli uomini d'oggi, Quattrini, Firenze, 1923)である。彼が、その前に発表したと主張する二作品については、疑問視されている。
- ベルシコは、友人クルチオ(Carlo Curzio)を通してゴベッティを知り、熱心に手紙を送った。クルチオはファシストであり、政治的立場はゴベッティと対立したが、彼の自由主義革命の解釈は認めていた。参考文献7) p.164, 174. <LRL>は22年創刊、24年に差押えの危機があったが、25年12月まで発行。ベルシコは、<LRL>の別冊の出版を提案したが、そ

れは24年12月に具体化された。創刊された文芸誌は、政治的な内容の<LRL>と区別され、欧州主義(europeismo)が主題となる。ゴベッティにとって、自由主義と欧州主義は、当時のイタリアを近代化させるための思想だったと考えられる。参考文献7) p.206.

¹³ 森田鉄郎編: イタリア史, 山川出版社, pp.482-483, 1976

¹⁴ 参考文献7) p.180, 187.

¹⁵ で発表された<Lettera a sir John Bickerstaff>(1927.6)は、ゴベッティの論説<Illuminismo>(1924.12)が展開されたものと分析される。参考文献7) pp.205-208. また、<LRL>に発表されたベルシコの三論文<Lettera dalla Spagna>(1924.12.16), <I partiti catalani>(1925.1.11), <Studio su Caillaux>(1925.10.18)に関しては、他の掲載論文に対して、多少抽象的でありマリアーニはみる。参考文献2) p.VIII. 註12参照。

¹⁶ ベルシコは、ゴベッティへの最初の手紙(23年未)に、『遠い港』(Porto lontano)と題した小説の草稿を添えるが、後に酷評される。ゴベッティから冷淡に扱われた理由として、二人の宗派(ゴベッティはプロテスタント、ベルシコはカトリック教徒)及び生活環境(トリノとナポリ)に起因する気質の違いが指摘される。参考文献7) p.172. その後、ベルシコは<LRL>の参加が認められ、さらに、イタリア南部で<LRL>を普及するよう依頼されるが、後者は成功しなかった。参考文献7) p.180-85.

¹⁷ ゴベッティのバリへの逃亡後、また彼の死後も、反ファシスト活動家と連絡を取り続けた。ゴベッティは23年に二回拘留され、26年2月パリで死亡。ベルシコも25年1月末から2月中旬まで拘留される。

¹⁸ クルチオへの手紙(27年10月24日付)、参考文献2) pp.296-7.

¹⁹ <Motor Italia>1927年12月号に掲載。ベルシコが労働者として流れ作業に加わった事実は不明。参考文献2) pp.X-XI. 彼は小輪発表後、編集活動に携わるが、順調には進まなかった。出版社(Motor Italia)から編集を依頼されるが、独立した仕事を望んで他社(Fratelli Ribet)に移る(クルチオへの手紙, 1927.7.27). 28年1月、出版社から離れ、グロモ(Mario Gromo, 1901-?)と編集所<Biblioteca Italiana Edoardo Persico>を設立。この時のテーマはカトリック思想と欧州主義だった。この活動も1作品(Giuseppe Prezzolini, Il sarto spirituale)の発表で終わる。参考文献2) p.XV

²⁰ 参考文献1) Vol.2, pp.3-5(8) pp.13-15(再録), 2) p.XI, 14) p.124. ゴベッティとグラムシの関係事実は不明。

²¹ Gobetti, Piero: Storia dei torinesi scritta da un liberale, <LRL>, No. 7, 1922.4. 関係については24年にこの工場を訪れた印象を25年に発表。Il nostro protestantesimo, <LRL>, 1925.5.17 参考文献1) Vol.2, pp.3-5, 脚注, 8) pp.13-15(再録)。タイトルから、トリノの工場労働者、自由主義、プロテスタント主義という思想と関連づけたものと推測される。グラムシとベルシコに関してはヴェロネージが指摘。参考文献1) Vol.2, pp.3-5, 脚注, 8) pp.13-15(再録)。

²² チュッチはグラムシの「新しい」秩序(ordine nuovo)に触れながらも、「神の意志」(による秩序)というベルシコの記述を強調する。参考文献13) p.40.

²³ デ・セータは、ベルシコの建築的解釈にも言及する一方、秩序、産業論理の権威、その道徳的価値に

関する彼の主張が、「先駆的な」企業主義と曲解されかねない懸念する。参考文献14) p.122-124.

²⁴ マリアーニは、「二人の思想はベルシコにおける主題ではないことを述べ、さらに、「規律への服従」

(obbedienza alla legge)等の言葉から、彼のカトリック思想について論を展開する。参考文献2) p.XI-XII

²⁵ Jessie Boswell, Nicola Galante, Gigi Chessa, Carlo Levi, Francesco Menzio, Enrico Paulucci による。当時、トリノでは企業家グリリーノ(Riccardo Grillo)とヴェントゥーリ(Lionello Venturi)を中心に、若い知識人のグループがあったことがこの展覧会の背景に考えられる。ベルシコは、メンツィオの展覧会(29年3月)カタログで紹介文を、<6>の記事<I sei pittori di Torino I>を<Le Arti Plastiche>(1929.7.16)に、31年に<I sei pittori di Torino II>(1930.7.16)を発表。参考文献1) p.77-82

²⁶ バルディは画家カゾラーティ(Felice Casorati, 1883-1963)を通してベルシコを知ったとされる。

²⁷ <Bv>の主な内容は、バルディの画廊に関するものである。29年5月15日号が創刊号。

²⁸ 前者二作品は、ファシスト政府の主催によるものである。拙稿: エドアルド・ベルシコの建築に関する活動について(前掲)参照。その他、店舗<パーカー>(Parker, Largo Santa Margherita, 1934, Corso Vittorio Emanuele, 1935)、友人や弟レナートの住宅内装及び家具の設計等がある。

²⁹ 原因は研究者によって様々に解釈される。彼の死後に発行された、36年1月号<C>

表紙の共同監修にはベルシコの名が記されている。2-3頁は彼の死亡報告が記される。

³⁰ 29年11月16日、<バルディ>で開催。この作品展は、11月18日、プレラ・アカデ

ミーの学生が騒動を起し、逮捕者を出す結果となった。参考文献10) pp.55-55, 336

³¹ カッラとソッフィチ(Carlo Carrà, 1881-?, Ardengo Soffici, 1879-?)の展覧会(30年1月25

日開催)、ロザイ(Ottone Rosai, 生没年不詳)の展覧会は話題を呼んだ。

³² ベルシコの署名は<Bv>n.2, 1930.2から確認される。彼の代筆に関しては、マリアーニによる指摘である。

³³ バルトリーニ署名の原稿は、<Carrà e Soffici>展のカタログへの論文だった。

³⁴ バルディは絵画館(Galleria dell'Arte)の運営のためにローマに渡る。ミラノの画廊は、

所有権も画家ギリングリ(Ghiringhelli)兄弟とローマ(Daniele Roma)にわたる。

³⁵ 30年8月18日付の画家カッローネ(Dino Garrone)宛の手紙(バルディを「舟形帽」, cappello a

barchettaとカッローネは称する)参考文献2) pp.324-326, 13) p.105. しかしベルシコは少なくとも

32年3月までバルディと連絡があった(32年3月24日付のバルディ宛の手紙が確認される)。

³⁶ 3月30日、ローマの絵画館で開催される。この展覧会に関して、拙稿: イタリア合理主義

建築展とそれに伴うMIAR (Movimento Italiano per l'Architettura Razionale)の活動につ

いて、日本建築学会計画系報告集、第548号, pp.285-291, 2001.10参照。バガーノは、

ミラノ巡回展を<プレラ>(Galleria di Brera)で開催し、開会をベルシコが運営する画廊

(Milione)で行うことを依頼した。また、展覧会は、31年1月にローマ、2月にミラノ、3

月にトリノでの開催を予定していた(30年8月19日付の手紙、タイパ、署名付)。

³⁷ ベルシコの講演は、6月19日、ベルマネンテ館(Palazzo Permanente)で行われ、「Ceci tuera

cela」という題目だった。この講演は、22日<アンブロジーノ>(L'Ambrosiano)紙で報告される。

³⁸ この時代の建築出版活動に関しては拙稿: 1920年代から1930年代までのイタリアの建築

運動について、1999年度日本建築学会関東支部研究報告集, p.633-636, 2000.3参照。

³⁹ <C>は28年にマランゴニ(Guido Marangoni)が創刊。彼の編集デザインは、記事

の内容に合わせてページ全体の構成をデザインする、当時は画期的なものだった。

⁴⁰ 編集長(Direttore)がバガーノ、編集者(Redattore)がベルシコと記載。35年1月よりベルシコが亡く

なる36年1月まで、二人が編集長となる。ベルシコは29年にバガーノ(とヴェントゥーリ)を知る。

⁴¹ 参考文献2) pp.XXIV-XXV. さらに彼は、バガーノを通して設計活動の機会も得た。

⁴² <De Seta, Cesare: Edoardo Persico e Giuseppe Pagano a "Casabella">, <C>440/441, pp.15-20, 1978.10-11,

参考文献6) pp.56-57(再録), 参考文献8) pp.174-175. 発表が中止される記事もあった。

⁴³ 例として、33年の<L>に現れた、ミラノ・トリエンナーレに関する一連の記事が挙げら

れる。参考文献2) p.79. 本稿4-1.参照。バガーノは、31年の合理主義建築展以降、ピアチェン

ティーニ(Marcello Piacentini, 1881-1960)の側につき、32年のローマ大学都市計画に参加、

さらに、34年、「もはや近代建築が国家の芸術である」と論じる(<ムッソリーニはイタリア

建築を救う>, Mussolini salva l'architettura italiana, <C>, p.78, 1934.6, SD8306, p.50, 1983.6)。

⁴⁴ 売上は3,000部を超えなかったが、当時としては多いものだった。拙稿(エドアルド・

ベルシコの建築に関する活動について、前掲)で「30,000部」の記述は誤り。また、バ

ルディによれば、<C>と<Q>の合併または協同の話があったが、立場の違いにより実

現しなかった。Bardi, Pier Maria: Tra "Quadrante" e "Casabella", <C>440/441, p.39, 1978.10-11

⁴⁵ <De Seta, 前掲, 参考文献6) pp.57-59. <Q>の監修者のボテンペリ(Massimo Bontempelli,

1878-1960)とバルディも建築家ではない。創刊には、ミラノ、コモの建築家に関わった。

⁴³ 審査には、議長、建築家ピアチェンティーニ(Marcello Piacentini,1881-1960)のほか3名と、トリエンナーレ組織委員のフェリチェ(Carlo Alberto Felice、生没年不詳)、画家シローニ(Mario Sironi,1885-1961)そしてバガーノが携わる。

⁴⁴ Enrico Crispolti, Centenario de Lucio Fontana,p.270, 1999, 初期のスケッチも確認される。参考文献 8)p.92

⁴⁵ 報告書の再録は、<C>No.98,1936.2, 参考文献 8)p.92 に掲載。

⁴⁶ 例えば、<D>や<C>を「舞台とする戦闘的な近代主義者が自ら範を示すにふさわしく、線と面に還元された鋭利な抽象性に満ち」た34年の<金章の闇>に対して、「彼は一挙に形而上的な柱とアイコンの具象性による地中海的伝統の肯定へと走った」と批判される。稲川直樹:ミラノ、コモの合理主義、p.28,SD8306,1983.6。この作品は、当時ドイツの雑誌にも紹介された。Meyer,Peter, Das Werk,1936.1,参考文献 8)p.196。この作品以前に(<Arte Romana>,<D>No.96 別冊、1935.12において)、彼は既に<古典的精神>を述べたことをチュッチは指摘する。参考文献 13)p.161

⁴⁷ チュッチによる指摘。彼はまた、この展覧会のベルシコとバガーノの作品にみる、二人の伝統への関心について論じ、古典的感覚というスタイルの意味でのベルシコの伝統への関心に対して、バガーノの関心は、伝統的機能性的美学的、道徳的価値であるとして、ベルシコの古典主義(classicismo)、バガーノの人民主義(populismo)を比較、検討する。参考文献 13)p.160-164

⁴⁸ ベルシコにおける問題は、ファシズムから古典性を取り除くことであるとヴェロネージはみる。参考文献 1)Vol.I,p.216-217.

⁴⁹ モンツァ・ピエンナーレに関する一連の記事は、30年3月から掲載。(<Ingresso a Monza>,<Bv>1930.3,<A Monza, fra breve>,<C>1930.4,etc. 参考文献 1),Vol.II,pp.9-16)。但し、デ・セータは、ベルシコの建築に関する最初の論文は27年の<フィアット:労働者達>とみる。参考文献 14)p.122.

⁵⁰ ここでは、<C>1930.5, No.29 について、検討した。参考文献 1)Vol.I,p.243,13)p.48,53.

⁵¹ ここでは、<C>1930.12 について翻訳、検討した。参考文献 1)Vol.II,p.31-36,13)p.49.

⁵² チュッチは、連戦の目的であるヨーロッパの好尚の創造は、普遍的な意識の創造であると述べ、さらに、資質、文化が人々を高める役割をもつこと、その資質は人々に為されるものではなく、人々に与えるものと述べる。参考文献 13)p.124。この考えに従うと、ベルシコは、一般の人々に視点を向け、彼等の文化的な意識を高めることを意図したと考えられる。

⁵³ 「ヴェントゥーリ、ベルシコ、フィネッティに示される例のように、最も卓越した文化的問題、「優美」(eleganza)という主題を差込む」参考文献 12)p.125.

⁵⁴ L'Architettura Gio Ponti<<LL>1934.4.29, 参考文献 1)Vol.II,p.268.

⁵⁵ ボンティの作品にみる<様式>について、参考文献 13)p.133、二人にみる<様式>の類似性について、参考文献 12)p.125.

⁵⁶ 出版に際し、ベルシコ本人は寄稿を断った(Editoriale Domus 宛の手紙、日付無し)。

⁵⁷ <D>35 年 12 月号別冊、参考文献 1)Vol.I,p.216-221。

⁵⁸ ゼーヴィによる指摘。参考文献 11)p.91-92.

⁵⁹ Pioneers of Modern Movement,from William Morris to Walter Gropius”(1936)と比較。参考文献 5)pp.87-88、参考文献 6)p.5-6.

⁶⁰ 参考文献 11)p.192。デ・フスコも「二大戦間で最も鋭敏な建築批評家」とみる。De Fusco, Renato: 前掲書,p.225.

⁶¹ <LL>1933.8.6。この時のトリエンナーレのテーマは近代建築であり、<具象芸術におけるノヴェチント、建築における合理主義>と紹介した。参考文献 13)p.152。"Errori stranieri",5.28,"Il gusto italiano",6.4,"Arte sacra",6.18,"Architettura mondiale",7.2,"Gli architetti italiani",8.6。後にバヴスナーは、ベルシコの英国建築家の作品批判に対し、反論を示す。前掲書(註2)p.98

⁶² L'Umanitaria alla Triennale"<C>、1933.10.

⁶³ この論文の掲載に対する周囲の反応から、編集者バヴォリーニ(Corrado Pavolini)は前文を添えることになる。参考文献 8)p.64-65.

⁶⁴ <Q>は、この論文の発表の約2カ月前に創刊された。グループ7のメンバーの中で、フィジーニ(Luigi Figini)、フレッテ(Guido Frette)、ポリリーニ(Gino Pollini)が<Q>創刊号に名を連ねた。テラーニは<Q>の創刊を提案した人物とされる。Tentori,Francesco:P.M.Bardi, Mazzotta,p.373,1990。拙稿:ジュゼッペ・テラーニ研究、日本建築学会梗概集、p.446、2000.9参照。<建築のプログラム>(Un programma d'architettura,<Q>1933.5)は、参考文献 12)p.117に再録。

⁶⁵ チュッチによれば、ベルシコは、ジョベルティ(GioBERTI,Vincenzo)の思考に従った。本文のような国(nazione)に対する宗教的価値観をもち、さらに、彼にとって、人間の存在する有り様、表現する様相は、道徳律の構成要素であり、生活の様式、スタイルにおいて実現するものだった。そして、彼のみる国の様式(stile nazionale)とは、国家(Stato)の介入で定義されるものではなく、ヨーロッパの伝統の構成部分であるという、かつての価値体系と結びつき、また、芸術家の道徳的行為の結果だった。参考文献 13)p.124、註54参照。<Stile>に関して、本稿 4.1、註 52 参照。

⁶⁶ グリッフィーニ(Enrico Griffini)とボットーニ(Piero Bottoni)の<人民の家>(Case popolari)

⁶⁷ フィジーニとボットーニ<芸術家の為の邸宅兼スタジオ>(Villa-studio per un artista)。この作品に関してダネージは、パテオ、ブル、サッネルム等が地中海性気候のために考えられ、トリエンナーレの敷地の気候に不適切と判断する。Danesi,Silvia:Aporie dell'architettura italiana in periodo fascista-mediterraneità e purismo,Il razionalismo e l'architettura in Italia durante il fascismo,La Biennale di Venezia,Electa,p.21,1976。<地中海性>という言葉に関して、<Q>の<プログラム>第6章では、「イタリア合理主義の特徴を明確にする-古典主義と地中海性の主張である。それは、形態や民俗学の中で理解されるものではなく、精神で理解されるものである」と述べられる。参考文献 12)p.117

⁶⁸ コルビュジェの<建築をめざして>(Vers une architecture,1923)の影響が指摘される。鶴沢隆:イタリア合理主義建築の研究、建築学会大会梗概集、N.9149,pp.2801-02、昭和 58 年 9 月

⁶⁹ 参考文献 13)p.127-128。この年の7月にCIAM会議がアテネで開催され、テラーニ、バルディ、ボットーニ、ポリリーニが出席。前掲書、p.126。34年、コルビュジェ、リットリオとサバウディアの訪問が<P>(No.14,1934.11-12)に報告される。Danesi,Silvia: 前掲書、p.24,28。グループ7の中心人物であったラーヴァは、合理主義建築宣言後にグループから離れ、本質的にイタリアの、地中海的な合理性を主張、<地中海性>という建築的テーマを独自に探求した。参考文献 13)p.100。本稿 4.2 参照

⁷⁰ この論文は多くのイタリア合理主義建築の研究書で取り上げられるが、チュッチは、この発言からロースに対するベルシコの評価まで検討した。ジョルジョ・チュッチ:テラーニと建築、鶴沢隆他15名、ジュゼッペ・テラーニ、INAX 出版、p.42,1998.

⁷¹ ノヴォコムン<大西洋横断船>(Transatlantico)と呼ばれていた。Vitale,Daniele: Novocomum. L'edificio, il lago, la città, Cavailleri,G and Roda,A(a cura di):Novocomum.casa d'abitazione,nuoveparole,p.15,1988。書簡の草稿は、縦長の用紙に黒インクで書かれ、さらに、青インクでタイプされたメモが切貼りされている。日付の記入はない。

⁷² <D>、No.83,pp.1-9,1934.11,参考文献 1)Vol.II,pp.303-322。この題目はベルシコによるもので、ボンティは<Necessità di un riesame>という題目の論文を依頼していた。参考文献 4)p.54.

⁷³ <Rapporto sull'architettura(per Mussolini)>、1931 年 3 月 30 日の開催時に渡された。

⁷⁴ アルガン、バガーノの論文を有益であると述べる一方、「コルビュジェの論文には理論的根拠があると誰も信じないだろう」と批判する。

⁷⁵ <Gli elementi dell'architettura funzionale>、1932。後に、サルトリスは「(そのことは)私を悩ませた」と述べる。彼は32年にベルシコにその本を見せていた。参考文献 5)p.153.

⁷⁶ 論文発表の数カ月前に行われた講演でも、当時の芸術運動の状況について重要な見解を示した(<Pittori siciliani>1934.6.5,Galleria del Milione)参考文献 3)p.43-55.

⁷⁷ Rava,C.E:Dell'eurospismo in architettura,Rassegna italiana,1928.2,Panorama del razionalismo,<D>、1931.1-7.11.

⁸⁰ コルビュジェに対しても「ファシズムに追従する」と非難を示すが、これは、本稿 4.1 の、ムッソリーニとの面会を試みたことと関係があるだろう。参考文献 13)p.127-128、10)pp.288-289.

⁸¹ 展覧会の経緯に関しては拙稿参照、前掲、註 24。<C>の第二回展の紹介で、地中海性という言葉が用いられる(<C>No.40,1931.4)。Danesi,Silvia: 前掲書、p.21,25。<C>の紹介文の執筆者は不明。

⁸² プレリュード(<Prélude、以下<P>)でコルビュジェは、ヨーロッパを4連邦に分け、その一つを「パリ、ローマ、アルジェリア、ナイジェリアの軸による、ギリシャ-ラテンの、西部の連邦」と主張する。ベルシコは、この主張と、アテネの第4回C.I.R.P.A.C.(CIAM-近代建築国際会議の執行委員会)会議での発言を<地中海性>と読み取る。バルディもまた、このCIAM会議の報告書<Cronaca di viaggio>(<Q>、No.5,1933.9)で、地中海建築が語られたことを述べる。彼はさらに、<P>の<plan d'organisation européen>(<P>No.6,1933.6-7)から、地中海連邦(Fédération méditerranéenne,<P>No.5,1933.5.15)或いはラテン連邦(Fédération latine,<P>No.6,1933.6-7)という言葉について言及、「(<P>では)まさに一つの軸という概念が主張されるが、それは一つの協力、地中海性といえるだろう。(略)<P>の編集者と私達ファシストの相互関係は、コルビュジェが「ファシスト建築」を行うという評判をバリで確実にした。」と述べ、コルビュジェとファシズムの関係も強調した。ダネージは「(<Q>派にとって)地中海性は、<エスプリ・ヌーヴォー>(Esprit Nouveau)のコルビュジェだけでなく、ギリシャ、美学的な純粋言語運動としての新プラトン主義であり、特にバルディにおいては、国家を征服する目的のために、それ以上の主題」であり、第二回展では、ローマの中央集権主義的な要請を満足させるため、合理主義者の言語をローマ性に置き換えた」とみる。Danesi,Silvia: 前掲書、註 92,pp.21-28。マリアーニも、バルディが地中海的な建築の概念を明確にするためにコルビュジェの発言をまとめたことに言及。参考文献 10)pp.235-236。<Q>派がコルビュジェを「最も地中海的なファシズムの建築家」とみたという指摘もある。鹿野正樹:イタリア合理主義とその時代、ジュゼッペ・テラーニ、FH Represent 1,p.44,1998

⁸³ 「ローマの遺産」(retaggio romano)は、リベラとミンョッチによる「展覧会序文」で示された。本文中の、<地中海性>の模倣の対象とされた凡庸な建築家とは、ロース、ホルツマイスター(Clemens Holzmeister)である。

⁸⁴ 「国家の芸術」は、26年の第一回<ノヴェチント・イタリアーノ>展開会式のムッソリーニによる演説のテーマとされる。鶴沢隆:モダニズムとファシズム、日伊文化研究、日伊協会、pp.49-50,1994.3

⁸⁵ ベルシコは、欧州の建築運動に結びつくイタリア建築の先見性を、合理主義運動の展開に伴う<地中海性>という言葉の曖昧性について対立させたと解釈される。参考文献 13)p.124.

⁸⁶ このことに関して、<社会芸術>に魅せられた建築家達は、欧州精神と関連づけられた<地中海性>という解釈によって、新しい精神とは矛盾する敵と共通点を持つと批判する。

⁸⁷ ミラノの建築家(E.Aleati,G.L.Banfi,L.B.Belgioioio,G.Ciotta,M.Mazzocchi,E.Perussutti,E.N.Rogers)の報告書を引用、協調都市とは国家の新しい理想を想定するため、イタリア建築の新しく具体的な経験の結果となるべきと主張する。ここで、チュッチが解釈する、ベルシコの国に対する認識が再び示される。参考文献 13)p.124.

⁸⁸ 彼によれば、その概念の基礎は、戦後、ブルジョワ階級の夢の新古典主義に変質、更に、ドイツのナチズム等の新しい動向が、公共の秩序の根本的な変更を開始する。

⁸⁹ 「反歴史性」について、ここで未来派の言及を避けたことが指摘される。参考文献 8)p.167.

⁹⁰ <Per la nuova architettura>,<C>、1933.1。この論文については 4.3。でも検討する。

⁹¹ 参考文献 1),Vol.II,p.223、参考文献 8)pp.117-126。Società Pro Cultura Femminile,dell'Istituto Fascista di Cultura で行われた。

⁹² 1945 年に出版される。前掲、註 5 参照。

⁹³ ゴベッティと考えられているが、この発言の出典は明らかにされていない。二人の偉大な友人として彼とゲッサ(Gigi Chessa)を挙げたとされる。参考文献 8)p.122.

⁹⁴ 33年に発表されたヴェントゥーリの論文の一節で、それに対するベルシコの見解はこの講演以前に示される。Persico,Edoardo:Il gusto italiano,<LL>、1933.6.4、参考文献 2)p.106 等。

⁹⁵ 雑誌<Pegaso>に発表された、ボンティ宛の手紙のテーマ。Persico,Edoardo: Il gusto italiano,<LL>、1933.6.4、参考文献 2)p.105 等。

⁹⁶ Maclair,Camille:L'impressionisme,1904

⁹⁷ Venturi,Lionello:Per la nuova architettura,<C>、1933.1

⁹⁸ ヴェントゥーリとベルシコの見解の相違について、前者は絵画を建築に優先させ、新しい建築の誕生をキュビズムの誕生に委ね、後者は「キュビズムの観点で具象的要素を検討するにはコルビュジェのみを正当化できるが(略)、グロビウス、メルニコフには、他の規範:表現主義の観点のそれを考え出さねばならない」と明晰に問題を見た、デ・セータは指摘する。参考文献 14)p.178.

⁹⁹ このようなベルシコの解釈を、ゼーヴィは1.建築と芸術の関係を印象主義まで拡大してライトを導き出し、2.印象主義を近代芸術の流れに挿入しと分析し、ギーディオン(Siegfried Giedion,1888-1968)と比較して評価する。参考文献 11)Vol.I,pp.194-195.

¹⁰⁰ ドイツではヒトラーの方針で勾配屋根が要求されたとされる。

¹⁰¹ ここではデ・ポナルドとコルビュジェをそのような議論をする人物に挙げて、暗に批判した。

¹⁰² 34年に開催された設計競技。提出作品の中で、モスクワのソヴィエト宮設計競技(第1次、31年)のJofan Boris Michajlovicの作品と類似した作品について取り上げ、好尚が問題にされたいことを示した。

¹⁰³ 厳格な思想、主義をもつゴベッティとの活動は、ベルシコの得た重要な経験と解釈される。

¹⁰⁴ D'Orsi,Angelo: 前掲書(註8)、参考文献 5)p.21。ベルシコが新しい芸術分野の役割について問うとき、タリック思想の形成、信仰と思考における、この宗教の伝統への関心、ゴベッティとの交友、クロウチェの誤解が、そのポイントであるとデ・セータは述べる。参考文献 5)p.96.

¹⁰⁵ ベルシコの、宗教的価値観による国に対する理解について、4.1.の項、註 67 参照。

¹⁰⁶ しかし、ゴベッティの自由主義革命思想のような具体的政治思想は、彼の建築批評には示されない。

¹⁰⁷ 4.1.、4.2.の項、註 71、82 参照。

¹⁰⁸ マリアーニはさらに、ベルシコが問題とするのは、表現の一貫性、つくるものに対する主義、信条の一貫性を追求することであり、また、建築を理解するとき問題となるのは、<様式>が明確に表された時代ではなく、その宗教性を明らかにする時であると述べる。マリアーニはまた、ここで述べる宗教性とキリスト教信仰が同意義でないことも述べる。参考文献 2)pp.XXXI-XXXIV

¹⁰⁹ チュッチは、フォンタナによる彫刻<Nike>(勝利の女神)は、平和な状態に戻るヨーロッパの象徴として称えられるものと述べる。参考文献 13)p.162

¹¹⁰ バガーノはMIARトリノ支部長だったが、当初から合理主義を主張したのではない。また、MIAR解散後の保守派との関係からも、ここでは彼がイタリア合理主義建築家かどうかの言及は避けた。

¹¹¹ 図版出典]

図 1 -De Seta,Cesare:Il destino dell'architettura-Persico Giolli Pagano,Laterza,1985

図 2~4 -個人蔵(Prof.Riccardo Mariani)

図 5 -Zevi,Bruno:Storia dell'Architettura Moderna,Einaudi,1950

(2002 年 5 月 9 日原稿受理、2002 年 10 月 2 日採用決定)